

2023年度 日本文化人類学会 次世代育成セミナー
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 文化／社会人類学セミナー
発表要旨

A 会場

アイヌ熊送りと〈自然との共生〉
——口承説話の分析から

馬場裕美（東北大学大学院）

アイヌ世界観の研究は、従来飼い熊儀礼の解釈をベースとして展開され、人と動物(神)との調和的關係が強調されてきた。しかし、熊をめぐるアイヌ口承説話には、自らを人に差し出す「好ましい」熊よりも、人と敵対する悪熊が多くを占める。本稿は、人と熊(神)との調和的關係という〈共生〉の世界観をはみ出す悪熊説話の検討を通して、説話生成プロセスやその意味などについて考察する。また、〈自然との共生〉をアイヌにおいて語ることの問題は、日本におけるアニミズム言説の課題とも構造的に類似したものとなることについても検討したい。

アイヌの熊説話を特定の話型へ特権性を与えず検討すると、熊の利用や追放といった暴力性・非対称性は隠されてはいない。関係性の互酬的側面は自明かつ自然発生的なものではなく、創出され更新されてゆくものであることがわかる。悪熊説話への注目は、ステレオタイプ化されたアイヌの〈共生〉を相対化し、多面的で現実的な、全体としてのアイヌ世界を捉える視点を提供する。またそれと同時に、説話において互酬的關係が強調される背景には、それが「ない」と認識されている現実を想像することができる。そのような意味において「互酬性の物語」は、不可能な現実に対しての「虚構」としての意味があると考えられる。

近年再定義されているアニミズム（新しい「アニミズム」）は、〈自然との共生〉エートスが付着した「互酬性の物語」を相対化する視点であり、熊と人との人格的關係を理解するために有用である。しかし、自然との分離や対立性が課題として意識されにくい日本のアニミズム論の文脈においては、表現上リニューアルされても、新たな文化ナショナリズム、新たなエートス化につながる可能性があることが課題である。

江戸時代前期の遊廓における性のあり方に関する考察

——『色道大鏡』を手がかりとして

杜崢（龍谷大学社会学研究科）

本論は江戸時代前期の遊女評判記として藤本箕山によって書かれた『色道大鏡』を主な資料として、遊廓における「色道」という具体的な実践を通して、江戸時代の遊廓における性に関する言説と現象を考察する。

江戸時代の「色道」は、遊廓での遊び方であり、振る舞いの作法である。江戸前期の遊廓は貴族趣味を継承しようとして作られた世界であり、「色道」は西洋社会がいう「性欲」を満たすだけのものではなく、客と遊女が共に教養を身に付けて経験する「性のあり方」（遊び方＝生き方）を実践する場である。遊廓では、身につけた教養と自己鍛錬により、身体経験をより敏感に感知することが追求される。具体的には、耳で聞く音楽、歌、目に映る絵と文章、着ている華やかな衣服、口にする洗練された酒食と快適な空間など、床入りまでの身体経験を一つの全体として捉え、享受するのである。同時に、遊女はこの押し付けられた「教養」——ここでは「文化資本」と「エロス資本」の複合——を活用し、遊廓という男性中心主義的な社会空間においても、エージェンシーを発揮し、自身の生存と利益を維持することを可能にしたことは、見過ごされるべきではない。

愛情と無情のはざままで

——モザンビーク・ロムウェ社会から母系制社会と離婚の関係を問い直す

田村優（新潟大学大学院現代社会文化研究科）

本稿はモザンビークのロムウェ社会を事例に、婚姻関係の不安定さから離婚が容易だとされてきた母系制社会において、パートナーとの別れを躊躇う人びとの事例を提示することで、母系制社会と離婚の関係を問い直す試みである。調査地リオマ村は伝統的には妻方居住婚、母系相続を実践しており離婚率も高いが、調査から見えてきたのは、先行研究とは裏腹に、離婚という人生選択について繰り返し思い悩む人びとの姿であった。

本稿では、婚姻歴がある62人女性へのインタビュー調査に基づき、結婚からの経過年数により離婚を2年以内、10年未満、10年以上という3区分に分類する。結婚から2年以内、10年未満のケースでは、パートナーとの間に経済社会的利害の不一致や暴力などの問題がある場合速やかに別れを決断している一方で、10年以上経つと問題があったとしても我慢して婚姻関係を継続する傾向にあることを明らかにする。

加えて、リオマ村を管轄する地方裁判所での離婚訴訟での語りを事例として扱うことで、世帯内で何が問題となり離婚の危機が生じ、それがどのように解決／収束されているかに着目しながら、離婚の詳細を追っていく。その中で、不倫し出て行った夫が更生し、戻ってくるまで何度も判決を先延ばししようとする妻、妻の不貞に際し離婚と賠償金を請求しつつ、それを支払えない妻に戻ってきて欲しいと懇願する夫など、「愛情と無情のはざま」揺れ動く人びとの姿を提示する。更に、離婚が容易でない要因として、長年連れ添うことにより醸成される夫婦の情緒的つながりの他、核家族化の進行、家族イデオロギーの強化やポップカルチャーの影響などを通じたロムウェ社会の婚姻と家族の変容があることを考察する。

B 会場

The Birth of the Astronomical Price:

An anthropological account of value and price in the Beijing art auction

張詩雋（北京大学 PD 研究員）

※オンライン参加

This is an ethnography describing the process of the birth of the astronomical price in the Beijing art market in the hope of empirically examining the anthropological discussion on the values of art. In particular, I focus on the uncertainty of the auction through the lenses of languages and behaviors. I seek to clarify that the construction of the astronomical price is not only link to the value of the object, but due to the collective effervescence formed by the agency of objects and the interactions of people at the auction site.

テロワールの感覚人類学的再考

—イタリア・トスカーナにおけるワイン生産の現場と味覚をめぐって

深谷拓未（京都大学大学院人間・環境学研究所）

本論文は、食と生産地の関係をめぐって、近年注目を集めるテロワールについて、感覚人類学的な視点を導入して検討することで、イタリア・トスカーナ州のワイン生産現場における味覚の在り方を論じるものである。

テロワールは、ワイン業界において、ワイン味覚上の特徴と場所（生産地）と端的に結び付ける概念・思想的背景である。既に感覚人類学において示されてきたように、記憶想起や食品を介して味覚と場所は不可分な関係に結ばれる。そして、人類学的なテロワール研究では、主に生産現場における実践・知識の側面が現象学的に説明され、ローカルな実践や感覚を通じてテロワールが構築・再生産される過程が明らかにされてきた。その一方で、テロワールを措定する研究では、テロワールが実体化されて記述されるために、本来ワイン生産現場に遍在しているはずの、グローバルな文脈や要素が抜け落ちている点に課題が残されている。一方、本論文では、ワイン生産の現場において、味覚に／が影響を与える政治性とグローバルな産業化を分析の対象とすることで、テロワール概念では捉え難いローカルな味覚の動態的な側面を検討するものである。

こうした論点を議論に盛り込むため、本論文では、グローバルに産業化したものとしてのワイン生産現場の位置づけを強調する。そして、生産実践を支える経済、資源空間としての畑、道具は、産業化どのような関係にあるか（Ⅲ章）、主に化学的分析に裏付けられる現在の醸造技術に対して、生産者がどのように感覚の使い、生産実践を変化させているか（Ⅳ章）、ワイン市場または観光といった「外部」の嗜好に対して、生産地ではどのような味の操作・調整がなされているか（Ⅴ章）について分析する。以上の検討を通じて、テロワール概念に回収するのではない、当該地域における味覚と実践・食のありかたを分析する。